

## 祭礼における『暴力』の発生と解決の民俗学的研究

(平成23年度科学研究費補助金・基盤研究(C)に採択)



ライフデザイン学科  
阿南 透 教授

科学研究費補助金が交付された  
研究を紹介します。

神輿や山車がぶつかり合うような

荒っぽい祭りでは、喧嘩などのトラブルがつきものです。ですが、しかるべき謝罪方法や処罰（今後の参加禁止など）といった相応の解決法が地域で決まっていました。些細なトラブルは問題にしないという暗黙の了解もあり、地域の内部で「当事者の論理」でもって問題を解決する知恵と権限がありました。

また、山車をぶつけ合うような祭りの中には、場所、対戦相手、衝突方法などを決めてから衝突し、トラブルを回避しながら力と技術を競い合っているという工夫も見られます。このように祭りの「ゲーム化」が進んでトラブルが減った場合には、「喧嘩祭」といったスローガンが登場して、祭りの観光資源化が進むこ

ともあります。

ところが、トラブルが加熱すると当事者だけでは問題を解決しきれなくなり、警察が介入し、極端な場合は裁判に訴えることも珍しくなくなりました。このため、新たな条例を作って暴力を取り締まるケースも出てきました。当事者だけでは解決できない問題が続出し、外部の専門家に委ねる時代になったのです。

今回はこのような、祭りにおける暴力のあり方と解決法の変化について、各地の実情を調べていきます。具体的には3名の研究者が、青森ねぶた祭、角館の祭り（秋田）、府中のくらやみ祭（東京）、森の祭り（静岡）、見付天神裸祭（静岡）、伏木けんか山（富山）、夜高行灯（富山）などを調査します。こうしたテーマはなかなか話を聞きに

くいのですが、長年にわたり現地調査を続けて信頼関係を築いている研究者が集まったので、現地調査に基づく比較研究が可能になりました。そして、こうした変化を生み出した大きな社会変動についても検討していきます。

こうした研究は、暴力に直面する全国の多くの祭り関係者にも意義のあるものと思われれます。また、祭りという「非日常」の時間に、「安全」という日常の論理が求められる社会の実情を踏まえると、「ハレとケ」といった民俗学の基本概念がどこまで有効なのか、理論的な再検討をしてみたいと考えています。